

令和元年6月4日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04789

研究課題名(和文) 大学教職科目における「道徳的実践力」を目指したケースメソッド教育の開発と評価

研究課題名(英文) Development and Evaluation of Case Method Education for Moral Education in University Teacher Training Curriculum

研究代表者

林 照子 (Hayashi, Teruko)

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：30434921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教職課程における道徳教育の実践的指導力を養成する教育方法として、ケースメソッド教育モデルカリキュラムを開発することを目的としている。その目的を達成するために、道徳に関する教職課程のケースメソッド教育実践とコースデザイン評価を行った。結果、教職課程科目「道徳教育(の指導法)」として、教授内容及び方法も含めた次の段階的カリキュラムが必要であることが明らかになった。我が国の道徳教育の歴史的な理解、多様な先駆的道徳教育実践内容とその方法の例示、を基盤として、ケースメソッドによる模擬授業、という主体的な学びを支えるカリキュラムを段階的に構成することが重要であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年児童生徒に対する道徳教育の充実と特別の教科「道徳」の指導方法の充実が求められるようになり、その指導方法として「主体的・対話的で深い学び」の視野に立った授業改善がもたれている。本研究では、この社会的要請に対する教職課程における道徳教育の実践的指導力を養成する教育方法として、ケースメソッド教育の実践モデルカリキュラムを提出した。本実践モデルの意義については、「考えさせ、議論させる」授業を教職課程で経験することは、学生自らが考える活動に取り組むだけでなく、教職科目「道徳教育」で扱うことによって、教科だけではない学校教育活動まで児童生徒に対する理解を深める可能性があることと示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted to develop a model curriculum for case method education as an educational method to cultivate practical teaching skills for moral education in teacher training courses. To this end, we did the following: 1) developed teaching materials for case method education, 2) analyzed classes of case method education for students attending teacher training courses, and 3) evaluated class models. Results showed that designing a curriculum is important, in addition to the content of teaching, by stages following a course design for teacher training course subjects: (1) A historical understanding of moral education in Japan, (2) Examples of practice of moral education, and (3) micro teaching using case method. The suggestion was made that experiencing classes that make schoolchildren “think and discuss” in teacher training courses can enhance student motivation for understanding school children in school educational activities across subjects.

研究分野：教育学

キーワード：ケースメソッド 道徳教育 教職科目 教職課程

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

「ケースメソッド教育」とは、判断や対処を求められるケース(事例)を教材とし、参加者がディスカッション(討論)を行いながら判断力や問題解決力を磨くことを目的として開発された教育方法である。ケースの当事者の立場に立って、自分ならばどのように行動すべきかを考える参加型、問題発見・解決型の教育方法でもある。特に、近年、児童生徒に対する道德教育の充実と特別の教科「道德」の指導方法の充実が求められるようになってきていること、その指導方法として、「主体的・対話的で深い学び」の視野に立った授業改善がもたれている。ケースメソッド教育は、教員養成課程の学生に「道德的実践力」に求められる問題解決のプロセスで意思決定を訓練することに有効(「教職課程担当教員プログラム」広島大学大学院教育学研究科ポートフォリオ)といった報告もみられるようになってきている。

しかしながら、上記のようにケースメソッド教育の導入と現職教育については成果が認められつつも、専門職教育の導入期ともいえる学部学生に対する教育効果については、さらなる実践と検証が必要であるのが実情である(丸山恭司・竹内伸一・岡田加奈子・磯島秀樹「教員養成・研修にケースメソッド教育を導入する：日本におけるその現状と課題」日本教育学会大会発表要旨集録、22、2011)。本研究では、その課題として、単発型の実践例ではなく、系統的な教職課程のための実践モデルカリキュラムが認められないことがあるのではないかと考えられた。

### 2. 研究の目的

学校全体で行う道德教育のニーズ調査を行い、教員養成段階で求められる学修内容を検討することを予備調査することとした。さらに、すでに研究代表者が開発してきたケースメソッド教育を実施することで、大学教職科目横断的な「道德的実践力」の指導力向上をめざし、ケースメソッド教育モデルを提出し、その評価を行うことを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 予備調査

国内においては、教職科目担当教員養成プログラム等先駆的取組みのある高等教育機関において教職科目「道德教育(の指導法)」に関する情報収集を行った。学校教育現場の実情としては、学校管理職を対象としてインタビュー調査を行い、教員養成段階で求められる道德的実践力および指導力についてケースメソッド教育教材開発に関する基礎資料を得た。

国外の動向に関しては、PSHE教育のある英国(ケント州)の大型教員養成機関および中等教育学校へのフィールド調査を行い、モラル教育に関する基礎資料の入手を行った。

#### (2) パイロット研究

既存のケースメソッド教育教材のうち、道德教育に求められる論点を検討し、研究者間で教職科目を中心に教育実践を進め、学会発表等で実践課題を提案した。

#### (3) 道德に関する教職課程におけるケースメソッド教育実践研究とそのモデルカリキュラムの提案とその評価

教職課程科目「道德教育(指導法)」においてモデルカリキュラムの実践とその事前事後評価を受講者および研究者間で相互評価を行い、モデルを提出する。

### 4. 研究成果

本研究の成果は学会発表等で報告された。その発表内容をまとめると以下のとおりである。

#### (1) 基礎的資料

##### モラル教育に関する英国の実情

学校独自のカリキュラムを示す材料の入手が不十分であったものの、拠点となる大型養成機関としての高等教育や特色ある中等教育のフィールドによって教育制度とそれを運用する教育現場の実情を知る手がかりとなった。多くの移民を抱える英国の文化的社会的背景とEU離脱もふくむ政策の動向による地域でのニーズを把握する必要があった。PSHEをはじめ宗教教育、人格教育が、ナショナル・カリキュラムを受けた教育課程、多様な学校種とコースが存在する。モラル教育の一端を担うPSHEについては、ナショナル・カリキュラムで示されたものの、法的拘束力のない学校独自のカリキュラムとして実施されていた。教員は各学校で自家採用され、教員養成も日本のようにコア・カリキュラムが示されるわけではなく、実務家のための教育課程のある高等教育機関にて研修をうけるコースもある。

本研究で行ったケント州の視察においては、経済格差の大きい地域から隔離されていたものの、中等教育学校及び高等教育機関においても、多文化の共生をどのように教室環境や学校生活で捉えるかがモラル教育の大きな課題である、と確認できた。英国は教育制度も複雑であるが、特に、多文化の多様性と共生といったテーマ、また、公教育のみならず、オルタナティブ教育の実践から学ぶところがあると考えられる。ただし、この場合、経済格差、同じ地域に住しながらも宗教的な信条等による個別化と英国のシステムにおける学校評価を丁寧に分析することができなければ一面的な理解にしかならないであろう。本研究の期間では「人格教育」への推奨への対応に注目されていた。

教職課程担当教員および学校管理職が捉える教員養成段階の「道徳的实践力」

学校管理職に聞き取り調査を行った結果、教育的使命感を実感できるような経験なく、それを養成段階で教えることはものすごく難しい、その人の経験に基づいて多様な価値観をもつ他者理解をする限界があると考えられていた。管理職にあっても若手教員の指導の難しさがあり、それを疑似体験できるような教授方法に対するニーズがみられた。

大学教職課程担当教員としては、限られた時間で我が国の道徳教育の歴史から指導法まで、実践的指導力を身につけさせるだけではなく、教育実習の研究授業まで指導助言していく。しかし、児童生徒に対する評価については今後も丁寧に学校教育現場と議論していく必要があると示唆された。

\*本研究当時、教職課程コア・カリキュラムの発表及び「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」（平成28年7月22日）が提示された直後の時期であった。

## （2）ケースメソッドを用いた教職課程科目「道徳教育（指導法）」モデルとその実践評価

初年度に計画したケースメソッド教育実践後、教育学関連学会発表を行い学会員からのフィードバックを手がかりに改善を加え、研究最終年度末にモデル授業の最終評価を行った。そのひとつとして、実際に本モデルを履修した学生に本モデルの体験についてインタビュー調査を行った。以下3点が評価できた。

道徳は「答えがない」というひとつの結論に導くことだけではないと捉え、模擬授業展開における「発問」の重要性を実感し「授業中もずっと悩み続けて」進行していた。

しかし、今回の実践から、担当教員との打合せ過程を経て、「授業をしている先生側の準備とか、授業に向けての気持ちとか、どうやってやるっていうのは、やる側じゃないとわからないので、それを知れたことはいろんなことに繋がっていくと思う」と、ケースメソッドに関わらず授業準備への意識変化の振り返りがみられた。将来、教育実習について、「準備する側としてなかなかこういう機会がない、教育実習は教育実習でそれは別のものになってしまうので、だからこそ、じっくり考えて授業準備できた教職課程の授業の意義を捉え直しさせられるコメントであったと考えられる。

模擬授業実践中も「相手ならばどのように考えるだろうか」という他者意識が認められた。

単なる授業の運営技法だけではなく、「今回は考えてもらうっていうことが一番大きかったので、それが一番、さらに考えてもらう種をまくことになる、聞かれるだけじゃそれがどれだけ重要になるかちゃんとわからなかったんで、そこが一番大きかった」という。

小学生を対象に教えることの意味を考えはじめていのである。ひとつの発問や子どもの発言の意味を吟味する機会になっている可能性がある。

「自分の考えを発表できるから、他の授業でも、自分はこう思うというか（中略）発言する力ができる。」という意見に対し、「発言できないけど、どこか考えている子もいるかもしれない。発言できなくても、気持ちの中で考えているなら、発言することができなくても、その子も成長しているかも。」という意見を重ねていた。さらに、「道徳」の授業で実施するときに、「小学生は考えてしまうと思う。授業終わった後も、どういうことがあったかなって考えてしまう。」とその難しさを述べている。しかしこの理解こそがまさに、授業だけではなく、学校全体で取り組む道徳教育の課題について意識しはじめたといっても過言ではない。インタビュー発話内容としてはあがってはいなかったが、インタビューの間、沈黙が多く、言葉にならない言葉を検索している様子が観察されたこともある。

また、教職課程学生が、本科目における模擬授業をケースメソッドで行うことができている背景としては、以下の3点が重要であることがあげられる。

ケースメソッドによる模擬授業に至るコースデザインである。

授業における討論ウエイトの段階的アップ、討論参加から討論リードへのブリッジング、最終到達点演出、などがあげられる。

最も重要なこととしては、ケースメソッドによる模擬授業実践への入念な学生に対する科目担当者の行うエンカレッジである。

以上から、本モデル実践の意義については、「考えさせ、議論させる」授業を教職課程で経験することは、学生自らが考える活動に取り組むだけではなく、教職科目「道徳教育」で扱うことによって、教科だけではない学校教育活動まで児童生徒に対する理解を深める可能性があるとして示唆された。

## （3）本研究課題全体の成果を要約すると以下の通りである。

モデルデザインは、教授内容のみならず、教授方法も含めて段階的に実施することである。道徳教育については、我が国の道徳教育の歴史的理解、多様な先駆的道徳教育実践内容と方法の例示、ケースメソッド教育で行う「道徳」模擬授業、というカリキュラムを構成することが重要であることが示された。そのためには教職課程科目担当者の学生に対する事前準備に対する討論的指導時間の充実が求められた。しかしながら、児童生徒に「考え・議論させる」という授業を教職課程で経験することは、学生自らが考える活動に取り組むだけではなく、教

職科目「道德教育」で扱うことによって、教科をこえた学校教育活動における児童生徒の理解に対する学生の動機を高める可能性がある」と示された。

本研究の全体としての課題は、「教職倫理」教育とのつながりを検討していくことであろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

林照子、英国ケント州を中心とした教育現場におけるモラル教育の現状と課題、甲南女子大学研究紀要、査読有、第 13 巻、2019、7 - 16

竹内伸一、林照子、道徳的実践力の向上を目指す教職課程におけるケースメソッド教育実践とその評価、中国四国教育学会編、教育学研究紀要、査読無、第 64 巻、2018、624 - 649

竹内伸一、林照子、教職科目「道德教育(指導法)」をいかに教授するかー「特別の教科 道德」をケースメソッドで教える教師の養成可能性に焦点を当ててー、中国四国教育学会編、教育学研究紀要、査読無、第 62 巻、2016、701 - 710

〔学会発表〕(計 2 件)

竹内伸一、林照子、道徳的実践力の向上を目指す教職課程におけるケースメソッド教育実践とその評価、中国四国教育学会第 70 回大会、2018 年 11 月(於：島根大学)

竹内伸一、林照子、教職科目「道德教育(指導法)」をいかに教授するかー「特別の教科 道德」をケースメソッドで教える教師の養成可能性に焦点を当ててー、中国四国教育学会第 68 回大会、2016 年 11 月(於：鳴門教育大学)

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：竹内 伸一

ローマ字氏名：(TAKEUCHI, shinichi)

所属研究機関名：名古屋商科大学

部局名：経営学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：60774487

研究分担者氏名：白石 龍生

ローマ字氏名：(SHIRAIISHI, tatsuo)

所属研究機関名：日本福祉大学

部局名：スポーツ科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：00116162

研究分担者氏名：竹内 伸宜

ローマ字氏名：(TAKEUCHI, nobuyoshi)

所属研究機関名：頌栄短期大学

部局名：その他

職名：教授

研究者番号(8桁)：80216853

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。